資料4－3

これまでの主な意見等の整理＜第3部会＞

10年後のあるべき姿・目標（どんな杉並区民に育ってほしいか）キーワード例⇒「循環」、「つながる」、「育む」、「自立」、「発見・創造」、「受信・発信」、「地域と密着・協働」、「関わる」、「支えあう」

すべての子どもへの切れ目のない成長・学びの支援

【子育ち、子育て】

○少子化・低成長時代は続くものと見込まれ、今後の労働条件・雇用条件と子育て家庭の生活（ワークライフバランス）を踏まえると子育て観を変える必要があり、これまでの施策の整理を行い、今後の施策を再構築することが必要である。
○身近な子育て支援策は、若い世代にとって出産するかどうか左右する大きな選択肢になる。母親が孤立化しないしくみを整える必要がある。
○親が地域の中で不安なく子育てできるよう、悩みを相談したり子育て家庭が相互に話し合える場は必要であり、ひととき保育や子育てサロンなどを備えた中核となるセンターが身近なところに必要である。
○既存の施設を有効活用して上記のようなセンターを設置する場合、杉並の特性として「児童館」を活用することになると思うが、その場合学童クラブをどうするかが課題である。また、このセンターと保健所・保健センターとの連携が重要である。
○杉並区は、保育園の待機児解消に積極的に取り組んでいるが、一方で財源という問題もあり、民間活力の活用を含めた対応を図る必要がある。また、行政コストからすると、区が保育施設を増やすより民間保育施設の保育料を助成（現金給付）する方向での対応も考える時期に来ていると思う。
○区が保育の待機児解消策を講じるほど、外部からの流入が増えて切りがない。単に保育施設を増やせば良いということではなく、今後の施策展開を考えるべき。
○労働条件の変化等を踏まえ、区は保護者の保育ニーズに対応してきたが、保育時間の拡大は子どもにとって良いことだとは思えない。今後は、企業など雇用側の姿勢が問われると思うので、ワークライフバランスへの理解を進める必要がある。
○国は幼保一体化の推進を掲げるが、杉並の私立幼稚園には広がっていない。良い取組だと思うので、区独自の推進策が必要だと思う。
○小学校入学前の保育園・幼稚園・その他の子育て施設において、成長過程に即した就学前教育が大切である。
○主に子育てするのは母親、ということで部会での議論がなされてきたが、これから共働き世帯は増加する。今後の10年を考えると、夫婦で子育てすることを前提に議論すべきである。
○多様な生活形態に対応した様々な保育施策を用意することが必要である。

【学齢期以降】

○「杉並で教育を受けると将来はこんな人に育つ」というような目標を設定して、皆で共有できると良い。
○子どもの基礎学力・生きる力を培うためには、人間関係能力やコミュニケーション能力を高める取組が必要であり、学校の中に、世代間の交流とか異文化の交流、ボランティア活動など、様々な人との関わりを積極的に取り入れていくことが求められる。
○子どもたちに、生きる力・考える力・行動力を備わせるためには、子どもに豊かな経験をさせるとともに、親自身の教育も必要である。
○生きる力・考える力を培う取組として、現在各学校で実践されている「特色ある教育活動」を一層活用すべきである。
○教師の役目はとても重要であり、教員の養成や力量の形成に引き続き取り組むことが必要である。
○特色ある教育という中で、外国語活動や国際理解教育などを区が教育の目玉として力を入れて取り組んではどうか。
○小中の連携はとても重要で小中一貫教育は今後も必要な取組である。さらに、高等教育とのつながりも視点に入れて取り組む必要がある。
○発達障害や障害と認定されないいわゆるグレーゾーンの子どもについては、早期対応が重要である。
○無気力な子どもやニートにならないための取組として、自分の価値観を高める教育が大事だと思う。
○家庭や家族が従来と大きく変化している中で、自立することとともに、子育てすることの必要性を学ぶことが求められていると思うので、中学校教育における「子育て」の教育の位置付けをしっかりするべきである。
○体験学習・職業体験の機会を増やし、将来に向けて子どもの力を養うことが重要である。

地域の子育て力・教育力・文化力の創造とつながり

【地域の力】

○高齢者や専門的な技術・技能を持つ区民など、地域に多数存在する人材や企業を発掘し、循環・継承させるシステムが必要だと思う。
○杉並の各地域には潜在的な様々なポテンシャルがある。今後は、新しいことを始めることだけでなく、眠っている地域の力の発掘・発見、育成・創造、継承・発信する観点が重要。
○地域の人が子どもたちとかかわりをもつことで、喜びを感じることが大事。それが、取組の継続性や広がりにつながると思う（知の循環型社会の構築）。
○基本構想における文化の位置付けは、高邁かつ抽象的なものではなく、より具体的な施策や道筋を踏まえたきめ細かな配慮（地域性・世代・領域等の場面での違い）が必要。
○これからの公共と文化の関係は、現場で地域と行政と専門家が協働していくような体制をつくらないといけない。
○基本構想の中で、「杉並の子ども文化を開かせよう」とか「子どもスポーツを開かせよう」というような重点的な視点というのを持つべきだと思う。
○共生社会の実現に向けて、多文化理解のための日本文化の理解が必要であり、また、コミュニケーションという側面からの日本語と外国語教育が大事だと思う。
○今後、小・中学校の施設更新にあたっては、子どもの視点だけでなく、広く区民が利用しやすい施設として有効活用できるように整備することを検討すべき。
○今後のスポーツ振興を世代間交流等を絡めながら進めることで、健康増進という側面のほか、青少年の健全育成(マナーを含む価値観を高め・育む)が図られるのではないか（タテヨコ社会でない斜めの関係の体験が必要）。
○生きる力・考える力・行動する力、社会力や人と共存していくことなど、子どもたちが自然に学ぶ場を設ける必要があり、例えば「放課後子ども教室」は有効な取組の一つである。
○子育て経験のある元気な高齢者はボランティア意欲もあり、身近な地域にいる大きな子を育てた現役世代が頼りになるので、こういう人たちを地域の子育て力に活かす視点が大事である。そうした活動を通じて、高齢者が子育て中の若い人たちから学ぶこともある。
○地域の中で必要とする人に、子育てに関する学習や情報を得られることができるとともに、顔を見合わせて相談できる身近な場があることが大事である。今後の子育て支援は、預かり施設を中心とした施策よりも、子育ち・子育てをきっかけにして新たなネットワークを築き、その人材を育て情報を提供していくことが大事だと思う。
○今後は、従来の地域や「民」のイメージから脱却し、都市部における地域とは何かを問い直し新たな関係を築いていかなければ、新たな課題への対応が図れないのではないか。
○杉並らしさを出して、地域性・地域の資源（人材）を活用していくことが必要だと思う。
○児童・青少年への文化環境づくりとして、新しい施設・事業・支援助成のしくみを作る必要はなく、現在あるものを横につなげていけばよいと思う。